

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

いまや地球環境問題は人類にとって最も大きな関心事になりつつあります。かつては石油資源の枯<sup>こかつ</sup>渇が大問題として懸<sup>ア</sup>念<sup>ア</sup>されていましたが、このままいくと資源が枯渇する前に環境の悪化によって人類は滅亡するのではない<sup>ない</sup>かという人もいます。かたや環境保護運動も盛んになっており、書店に行くと「地球にやさしい〇〇」とか、「地球を救う××」といったタイトルの本が数多く見受けられます。家電製品などの広告にも似たような文句がありますね。わたしの勤めている大学では節電運動をやっており、あるポスターにはでっかく「地球治癒<sup>ちゆ</sup>」と書かれていました。

しかし、よく考えてみればこれほど欺<sup>ぎまん</sup>瞞<sup>まん</sup>的なものもあります。万が一温暖化が非常に進んで陸地のほとんどが水没しても、地球そのものはびくともせず存在し続けます。こういったスローガンに欠けているのは、地球環境問題<sup>2</sup>といったときの「環境」とは何であり、「問題」とは誰にとっての問題かという意識です。

チューブワームが生息しているのは光の届かない深海です。地球上のほとんどの種は、生産者が太陽エネルギーを利用してつくる有機物の循環サイクルのなかに組み込まれています。わたしたち人間もそうですが、ただ現代人は少しここから外れてしまっているといえるでしょう。その話は次章です。そして、チューブワームは太陽エネルギーとは無縁の環境にいますから、これとは別のサイクルに組み込まれているわけです。彼らにとって太陽エネルギーの代わりになっているのは地熱です。熱水の噴出孔の周りには、チューブワームだけではなくイソギンチャクやエビ、カニなどさまざまな種が、地熱のエネルギーを基にした生態系を築いています。

もちろん彼らとて呼吸に酸素は必要であり、酸素は光合成からつくられますから、まったく地上<sup>3</sup>の生態系と独立しているとはいえない<sup>ない</sup>でしょう。しかし、いわゆる地球環境破壊によって人類が滅亡しても、チューブワームにはほとんど何の影響もない<sup>ない</sup>に違いありません。

チューブワームよりもさらに影響を受けそうにないのが単細胞生物です。

わたしたちは生物というと哺乳<sup>ほにゅう</sup>類や魚、昆虫などを思い浮かべますが、これらは皆複数の細胞からできているものです。単一の細胞からなる微生物は肉眼ではまず見えないため、人間にとってはあまり意識されることがありませんが、実はこれらの単細胞生物こそ地球上で最も種類が多く、あらゆるところにはびこっている生物なのです。最近では、地下一〇〇メートルの岩石にできたわずかな隙間<sup>すきま</sup>に、酸素がなくても生きていける微生物が多数生息していることが分かっています。彼らにとって地上の人間とそれを取り巻く環境などほとんど無関係でしょう。

つまり、地球環境「問題」というのはあくまでわたしたち人間にとっての問題だということです。人間が適応してきたニッチが失われるからこそ、それが脅威になるのです。ですから、「地球にやさしい〇〇」ではなく、その本質は「人類にやさしい〇〇」だといえるでしょう。

自然保護を正当化する理由として、それによって人間に何らかの利益がもたらされるからだというものがあります。例えば、いま生物多様性の保護が大きな問題となっています。熱帯雨林の破壊などにより、人<sup>ヒト</sup>為<sup>ため</sup>的な理由で多くの生物種が絶滅しているわけですが、なぜ多様性が失われることが問題になるのでしょうか。

理由として、その種が医療や食料、産業にとっての利益をもたらす可能性があること、二酸化炭素の吸収といった人間の生命維持に貢献すること、あるいは観光資源になることなどが挙げられるわけですが、このように人間への直接的・間接的な利益をもちだして保護の正当性とするのを、環境倫理学では「人間中心主義」と呼んでいます。環境倫理学はこのような人間中心主義が現在の環境破壊の根底にあるという立場をとっており、これに對抗する概念<sup>概念</sup>として、非人間中心主義、あるいは自然中心主義というものが唱えられています。

その典型的なものがデイープ・エコロジーと呼ばれる思想で、すべての生物には等しく内在的価値があり、権<sup>権</sup>利<sup>利</sup>があるのだと主張するものです。そこから、人間の利益のために自然環境を保護するという「保全」という思想と、自然環境にはそれ自体に内在的価値があるから保護するのだ、という「保存」という思想の対立が出てきます。一言で自然保護といっても、実は「保全」と「保存」とではかなり発想が異なるわけです。

S F小説でこういうものがありました。あるロボットが要人の暗殺を阻止する命令を受けます。そのロボットはどうやって要人を守るかずっと悩んだあげく、守るべき要人を自分で（あ）し、「これで暗殺は不可能です」と言ったそうです。これは「フレーム問題」という、人工知能研究における重要な問題を扱った有名な話です。

環境問題にも同じことがいえるのかもしれませんが。地球上に人類がいなくなってしまうえば、環境問題を問題にする者がいなくなるわけですから、環境問題は解決します。しかし、そんな解決が解決といえるのでしょうか。

論理的な側面の議論は後の章です。そして、極端なかたちの自然中心主義は少なくとも論理的には誤りであるということがいえるでしょう。環境問題の対象となる「問題」が、人間の棲<sup>す</sup>むニッチに関わるものである以上、ある程度人間を中心に考えざるを得ないのではないのでしょうか。もちろん、それは「人間優位主義<sup>6</sup>」とは異なります。

（小田 亮『ヒトは環境を壊す動物である』より）

語注 ・欺瞞：人の目をごかし、だますこと。 ・チューブワーム：深海の熱水・冷水の湧いている部分に群落を形成するハオリムシ類 ・脅威：威力によるおどし。また、おびやかされること。 ・デイープ・エコロジー：人間の利益のためではなく、生命の固有価値が存在すると考えるゆえに、環境の保護を支持する思想。 ・ニッチ：個々の生物種が、生態系の中で占める位置または役割。

〈設問〉

問一 〜〜線部アㄱウの漢字の読みをひらがなで書きなさい。(ただし、楷書で丁寧を書くこと)

問二 〜〜線部エ「権利」の対義語を漢字で書きなさい。(ただし、楷書で丁寧に書くこと)

問三 ……線部aㄱdの「ない」のうち、他の三つの「ない」と働きが違うものを一つ選んで、記号で答えなさい。

問四 (あ)には、ロボットの行動を表す動詞の一部が入ります。文中から漢字一字で書き抜いて答えなさい。

問五 ――線部1「これほど欺瞞的なものはありません」とありますが、なぜですか。その理由として、もっともふさわしいものを次のアㄱエの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 節電していると言っても、毎日の暮らしの中で電気をまったく使わないわけではないから。  
イ 家電製品が「地球にやさしい」と言っても、それを生産するときに大気を汚しているから。  
ウ 人類が滅亡するような状態に陥っても、地球自体は何の影響も受けずに存在し続けるから。  
エ 地球のためと言って、さまざまな試みに取り組もうとしても世界がひとつにならないから。

問六 ――線部2「地球環境問題」といったときの『環境』とありますが、ここで言う「環境」を示す部分を文中から十五字でさがし、書き抜いて答えなさい。

問七 ――線部3「地上の生態系」とありますが、具体的にはどんなものですか。それを示す部分を文中から二十一字でさがし、書き抜いて答えなさい。

問八 ――線部4「その本質は『人類にやさしい○○』だといえる」とありますが、なぜそう言えるのですか。その理由として、もっともふさわしいものを次のアㄱエの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 地球の心配をしているようでも、本当に心配しているのは人類の未来だから。  
イ 科学技術によって人類にとって都合のいい世界を作り出して生きているから。  
ウ 地球はたとえどんな状況になろうとも破滅するようなことはあり得ないから。  
エ 地球を大切にすることで人間の心がおだやかになり争いごとがなくなるから。

問九 ――線部5「一言で自然保護といっても、実は『保全』と『保存』とはかなり発想が異なるわけです」とありますが、次のアㄱオは「保全」と「保存」のどちらだと考えられますか。「保全」はa、「保存」はbと記号で答えなさい。

ア なるべく割り箸は使わない    イ トキの保護活動    ウ ニホンカモシカを天然記念物に指定する  
エ 砂漠化した大地に緑を植える    オ 車の排気ガスに制限をつける

問十 ――線部6「人間優位主義」とありますが、どんな考え方のことですか。その説明として、もっともふさわしいものを次のアㄱエの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 人間も自然の一部なのだから自然を征服するなど考えずに「共存」を目指していく考え方。  
イ 人間には優れた科学技術があるのだから、地球上のすべてを思い通りに出来るという考え方。  
ウ 自然も大切だが、地球は人間の生活の場なので、ある程度人間を優先すべきだという考え方。  
エ 自然は人間があつてこそ保たれるから、あらゆる面で人間が中心となるべきだという考え方。

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

この伯父<sup>おじ</sup>を、私たちは「おもちゃのオジサン」と呼んでいた。伯父が来るときには、いつも両手に余るほどいろいろなオモチャをお土産に持って現れたからである。

浅草橋あたりにはそういう方面のト<sup>ッ</sup>ンヤなどもあって気軽に安く買ったりできたのかもしれない。当時、父はまだペエペエの役人で、家の暮らし向きはごくシ<sup>ッ</sup>ツンなものだったから、普段はほとんどオモチャなどは買ってもらえなかった。

そのぶん、この伯父が私たち兄弟にとつての通年サンタクロスだったのである。

お土産はゴム風船や花火のような小さなものであることもあったし、三輪車や自転車のような大きなものであることもあった。

たいていは、しかし、ブリキのカラクリぜんまい仕掛けの宇宙<sup>ウツ</sup>タン<sup>ケン</sup>ロボットであったり、しつぽを振る犬であったりした。

外にラビット号のバタバタする音が止まると、しばらくしてから、

「ほらあ、おみやげだぞお」

と、そんなふうに言って伯父は家に入ってくる。

子どもたちにとつてそれが嬉しくないはずはなかったが、私はいつもちよつと複雑な気持ちをした。それがどんなオモチャであれ、兄がすべて独占してしまうからであった。

面白そうなオモチャであればあるほど、私には、それが兄に取られてしまうことが分っていて、決して単純には喜べなかったのである。

伯父もそのあたりは多少分っていて、オモチャは一つだけでなくたいてい二つ持ってきた。しかし仮にそうだとしても、同じものが二つ用意されるわけではないので、まず兄が面白そうなのを取ってしまい、残りが私にあてがわれるということになるのだった。

しかたがない、と私は諦<sup>あきら</sup>めて、そのあてがわれたオモチャを使ってあれこれと遊びを工夫するのが常であったが、そうすると、飽きっぽい兄はすぐ己<sup>おのれ</sup>のオモチャに倦<sup>う</sup>んで、

「おい、それ貸せ」

と言わざま、力づくで取り上げてしまう。

追いかけても俊敏な兄には追いつけなかったし、力で奪い返そうとしても腕力でもとうてい敵しえないのが、この一歳という年齢のどうしようもないハンディであった。

仕方なく、兄の見放したほうのオモチャを手に入れて、それで遊んでいると、こんどはまた「それは、ボクんだぞ」と言って、そちらも取り上げられてしまう。そんなことがよくあった。

もちろん私は、その理不<sup>り</sup>尽な押<sup>お</sup>領<sup>りやう</sup>に対して手を拱<sup>こまね</sup>いてばかりいたわけではない。泣いて抗議し、母に訴えるなどもしたけれど、私のオモチャが私の手に返ってくるのはその当座だけで、またいつの間にか兄に取り上げられてしまうということの繰り返しだった。

兄は俊敏なぶんだけまた乱暴でもあって、私から取り上げたオモチャを手荒に扱っては、しまいに壊してしまう。そうして、もう壊れて動かなくなつたそれを、ぽいっと返してよこした。

私は情<sup>なさけ</sup>けない思いで、その動かなくなつたオモチャをなんとかして動かそうとしたものだったが、一度死<sup>し</sup>んでしまつたオモチャはたいてい生き返りはしなかった。

兄弟げんかは、しばしば私の体に思い掛けないダメージを与えた。

やや大きくなると、私とてそう（ a ）と自分のオモチャを取り上げられてばかりもいなかった。ときには「死守」の態勢に出ることもあったのである。

そういうときは、小さな手でしっかり握って絶対に放すものかという意気で抵抗した。

しまいに足で蹴<sup>け</sup>ったり兄の手に噛みついたりもして、大騒ぎになるのだったが、母は私たち兄弟に平等<sup>せいとう</sup>に説<sup>せつ</sup>諭<sup>ゆ</sup>するのが常で、なんだか分らないけれど「ケンカリョウセイバイ」などという難しいことを言い聞かせたりした。

たしかに蹴<sup>け</sup>ったり噛んだりしたのはいけなかったかもしれないけれど、そうでもないかと、私はすべて自分の領分を兄に差し押さえられてしまう危険があったのだから、両<sup>りやう</sup>成<sup>せい</sup>敗<sup>ぱい</sup>なんて不公平な気がした。

アクシデントは、こうした取り合いのさなかに起こつた。

抵抗する私に対して、兄は、力任せにその手を引っ張って奪い取ろうとする。すると、まだひ弱だった私の肩や肘<sup>ひじ</sup>の関節が、あつという間に脱臼<sup>だつぎゅう</sup>してしまうのだった。

その瞬間の電撃的な痛みを私は忘れない。

たちまち私の手は木偶<sup>くわく</sup>の坊のように動かなくなり、ほんの少し動かしただけで、腕にも肩にも鋭い痛みが走った。

（ b ）のついたように泣き叫ぶ私の声に驚いて、隣の部屋で縫い物などをしていた母が飛んでくる。

「どうしたの、何したの」

母は顔色を変えて兄を詰問<sup>きつもん</sup>する。しかし兄は、

「知らないっ」

とそっぽを向いてしまう。

私の腕がぶらぶらになってしまっているのを見た母は、即座に私を自転車の後ろに乗せて近所の外科だか骨接<sup>ほつぎ</sup>ぎだかに

連れていった。

自転車が揺れるたびに腕や肩がびりびりと痛んで、その医者に着くまでのあいだの長かったことといったらなかった。着くと、もうお爺さんじいのような白衣の医者が、ニコニコして言った。

「ああ、これは痛い、痛いなあ、しかし、男の子は泣かんで我慢しなくちやいかんぞお」  
そんなことを言いながら、その人は私の腕を取ると、どこをどうするものだか、不思議な塩梅あんばいにぐるりと動かす。すると、カクンという感じに関節が嵌はまって、いままで一センチだって動かしたら痛かったものが嘘のように治ってしまうのだった。

「ほーら、痛くない、もう痛くないぞお」

その通り、ほんとうに痛くなくなつて、私は夕立7が止やむように泣きやんだ。

するとお爺さんの医者は、何かガラス戸のなから大きな缶カラを取り出し、金属の籠へのようなものを使って私の脱臼した肩の関節のあたりに真つ黒な膏藥こうやくをべつとりと塗り付ける。そして全体を包帯で巻き、三角巾さんかくしんで首から吊つて固定する。手当はそれでおしまいだった。

「しばらくね、また脱けやすいから、こうしておいてね、乱暴な運動はしないようにしなければいけませんよ」  
というようなことを医者が言い、母は、神妙うなずに頷いた。

家に帰ると、さすがに心配そうな顔で兄が待っていた。もしかして、ほんとに腕が引っこ抜けてしまうのかと思つて心配していたらしい。

「治ったけど、もう乱暴はしないでよ。あんたが乱暴するからこういうことになるんだからね」  
母に叱しかられて兄は、ちよつとまずいことになったなあ、という表情になった。

そして、恐る恐る私の包帯だらけの肩に触り、

「だいじょうぶ？痛かった？」

と聞き、照れたような小さな声で、

「ごめんな」

と謝った。

<sup>8</sup>私は兄をへこませたような感じがして、ちよつとだけ嬉しかった。

そうして、ほんとうはもう痛くなかつたけれど、わざと痛そうな表情を作り、黙つてこくと頷いてみせた。

（林 望『東京坊ちゃん』より）

語注

・倦んで：同じ状態が長く続いて、いやになる。飽きる。 ・拱こまいて：腕組みをする。何もしないでじつとただ傍観ぼうかんしている。 ・木偶こくの坊：木の人形。また、それと同じように役に立たない人をのしる言葉。 ・膏藥こうやく：動物のあぶらで練り合わせた、傷・できものなどの外用薬。

〈設問〉

問一

~~~~線部アㄣウのカタカナを漢字に直しなさい。

問二

（ ） 欄 a には「恥知らずな・平気な」様子を表す語句が入ります。もつともふさわしいものを次のアㄣオの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア もたもと      イ だらだらと      ウ おめおめと      エ すごすごと      オ このこと

問三

（ ） 欄 b に適語（漢字一字）を入れて「はげしく泣き叫ぶ」様子を表す慣用句を完成させなさい。

問四

——線部 1「この伯父が私たち兄弟にとつての通年サンタクロースだったのである」とありますが、どういう意味ですか。もつともふさわしいものを次のアㄣエの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 年に一度しか「私」たちの前に現れないサンタクロースのように正体不明だということ。  
イ 一年中「私」たちにサンタクロースのようにプレゼントを持ってきてくれるということ。  
ウ サンタクロースのそりのようにオートバイにお土産を載せて走り回っているということ。  
エ 常に子どもたちのしあわせを考えている優しさがサンタクロースに似ているということ。

問五

——線部 2「しかたがない、と私は諦めて」とありますが、なぜ「諦めて」しまうのですか。その理由を示す部分を文中から五十文字以内でさがし、はじめとおわりの五字を書き抜いて答えなさい。

問六

——線部3「理不尽な押領」とありますが、どのような点が「理不尽」のですか。その理由としてもっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 自分より早く生まれたというだけで、弟の「私」はすべて兄の言うとおりにしなくてはならないから。  
イ 自分より腕力や俊敏さが勝っているというだけで、なんでも思いどおりになると兄が思っているから。  
ウ 自分のおもちゃに飽きて「私」を取り上げ、さらに自分が放棄したもので奪い取ろうとするから。  
エ 自分のおもちゃを取られたことを母親に訴えても、兄が返してくれるのはほんのわずかな時間だから。

問七

——線部4「情けない思い」とありますが、どういう「思い」ですか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 悪いことをしても叱られない兄と比べ、自分は母親に大事にされていないと感じ悲しむ気持ち。  
イ 一歳しか違わないのに、どんなに頑張っても兄に力負けしてしまう自分のひ弱さを嘆く気持ち。  
ウ 言葉での抗議も腕力での抵抗もできず、兄に壊されたおもちゃで遊ぶ自分を切なく思う気持ち。  
エ 兄の横暴に対して体を張って抗議をする勇気のない気の弱い自分をだめな人間だと思う気持ち。

問八

——線部5「一度死んでしまったオモチャはたいいてい生き返りはしなかった」とありますが、ここで用いられている表現技法は何ですか。その技法名を漢字三字で答えなさい。

問九

——線部6「両成敗」とありますが、ここではどうすることですか。その行為を示す部分を文中から十字でさがし、書き抜いて答えなさい。

問十

——線部7「夕立が止むように泣きやんだ」とありますが、この比喻から「私」はどんなふうに泣きやんだと考えられますか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 大暴れをしてあたりを散らかしたあとに泣きやんだ。  
イ 大粒の涙をあふれさせ、大泣きに泣いて泣きやんだ。  
ウ 雷のように大きな声で叫んで騒いであら泣きやんだ。  
エ 大泣きしていたのが嘘のようにぴたりと泣きやんだ。

問十一

——線部8「私は兄をへこませたような感じがして、ちよつとだけ嬉しかった」とありますが、この時の「私」の気持ちはどんなものと考えられますか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 母の兄に対する信頼が失われたことで、母が自分を見てくれるだろうと考え、嬉しかった。  
イ どんなことをしてもかなわなかった兄が「ごめん」と謝ったことでやつつけた気になった。  
ウ 家の中で我が物顔でやりたい放題やっている兄が、母に叱られている姿を見て気が晴れた。  
エ 兄になにかされたら大げさに怪我をしたふりをすればいいことがわかってほつとしている。